

■大粒で高品質な酒米‘吟の夢’を生産するための施肥法

‘吟の夢’は、酒造適性が高く、造られた酒の味、香りもよい中生の酒造好適米（もと米）品種として、平成9年度に県の奨励品種として採用されました。採用までに行われた現地試験では、酒米として高い収量性を示しましたが、産地や栽培条件などにより心白の発現程度や千粒重に変動がみられ、品種本来の醸造適性が十分発揮されていない場合もみうけられました。そこで、平成12年より粒張りがよく、心白発現率が高い高品質の酒米を安定的に生産するための窒素施肥法を検討してきました。その結果、全量基肥施用でなく、穂肥を幼穂形成期（出穂20日前頃）に施用することで品質の向上が認められました。さらに穂肥を幼穂形成期と穂ばらみ期（同10日前頃）に分けて施用すると心白発現率や千粒重といった酒造適性が高まることも分かりました。また、緩効性被覆尿素肥料を全層に基肥として施用すると多収となりますが、タンパク質含有率がやや高まり、品質や酒造適性が低下しやすくなるのが現地（本山町、土佐山田町）においても実証されました（図1）。

これらのことから、‘吟の夢’の窒素施肥法としては高度化成を用いた基肥＋穂肥体系が望ましく、この場合の窒素施用量は土壌条件によって多少調整が必要

ですが、10a当たり成分量で基肥4kg、穂肥3kg程度でよいと考えられます。その際、さらに粒張りをよくするには穂肥の分施が有効です。施肥作業に多少手間がかかりますが、これによって、粒重がより大きく、タンパク質含有率の低い高品質で酒造適性の優れる‘吟の夢’の玄米生産が期待できます。

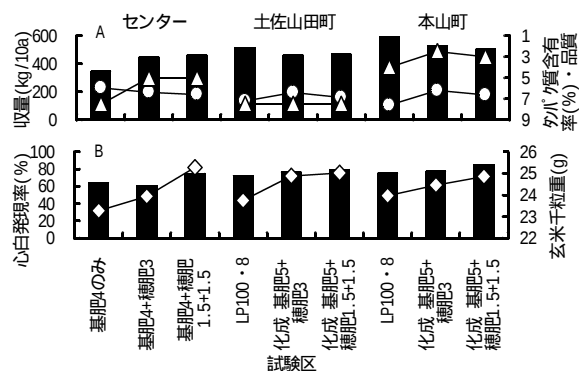


図1 窒素施肥法と収量、品質、酒造適性との関係
(平成14年)

注) 図A: ■は収量、○はタンパク質含有率、△は品質(1は特等、2、3は特、4は1等、5、6は2等、7、8は3等、9は規格外)、高松食糧事務所高知事務所による。図B: ■は心白発現率、△は玄米千粒重(粒厚1.8mm以上)。

[水田作物科 坂田 雅正]